

探訪 北の風景 24

勇払原野のマガン 苫小牧市・ウトナイ湖

青木和弘

苫小牧市のウトナイ湖でマガンの飛翔を見ようと「たそがれに雁を見る会」に参加した。「ウトナイ湖サンクチュアリ」(苫小牧市植苗150の3)と日本野鳥の会苫小牧支部の共催行事で毎年開かれている。今年は3月19日17時からで、苫小牧市や札幌市などから約50人が参加した。

札幌から車で向かう途中から小雨が降り出したが、駐車場に着くと雨は上がっていた。防寒着を身につけ長靴に履き替え、傘を持参した。案内看板に従って木道を100メートルほど行くとウトナイ湖サンクチュアリに到着する。ここで、17時から野鳥の会のレンジャーから観察のポイントな

どの説明があり、その後、湖畔に移動して、編隊を組んで飛来するマガンを40分ほど観察した。遊歩道には、まだ所々に雪が残っていた。

マガンは、キツネなどの天敵から身を守るため、夜は水に浮かんで眠る。ウトナイ湖は絶好のねぐらなのだ。マガンたちは夜明けとともに湖から一斉に飛び立って、餌のある水田や畑へ落ち穂などを食べに行く。この飛び立ちを「ねぐら立ち」といい、日の入り前に戻ってくるのを「ねぐら入り」という。だから、昼間はここにマガンはいない。

今年は、2月13日、第1陣がウトナイ湖にやってきて、3月18日には10万6000羽まで増えた。初旬には、太平洋岸に近い鶴川や厚真方面の田畑へ通っていたが、雪解けが進んだせいで、この日はウトナイ湖の北に位置する千歳市方面から戻る群れが多かった。雪解け直後は落ち穂もいっぱい残っているのだろう。

群れをなすマガンだが、その中に一回り大きなヒシクイの群れも混ざっている。同じガンの仲間だが、マガンの大きさは約70センチ、ヒシクイは約85センチだ。「キヤハハ」というかん高い鳴き声はマガン、「ガハハ」という低いダミ声はヒシクイだ。この日は、ヒシクイは少ないらしく、私には確認できなかった。

近年、道内で越冬するマガンがいるが、多くは宮城県伊豆沼など本州で冬を過ごし、雪解けを



餌場から帰ってくるマガンの編隊が次々に現れる

待つてウトナイ湖や近くの弁天沼に移ってくる。4月になって美幌市の宮島沼の結氷が開けると一斉に移動し、5月初旬ごろまでには繁殖地のシベリアへ4000キロもの長旅に出る。ウトナイ湖で次にマガンが観察できるのは10月から11月ごろになる。

ウトナイ湖の野鳥で、現在までに記録されているのは271種類。3月から4月にかけてよく見ることができるのは、マガンやヒシクイなどガンの仲間のほか、オオハクチョウ、マガモ、オジロワシ、オオワシ、トビ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アトリなどだ。ウトナイ湖サンクチュアリで双眼鏡の貸し出しもしているので、利用するといい。

「ウトナイ湖サンクチュアリ」は日本野鳥の会が





オジロワシでも現れたのか、ねぐら入りして水面に浮かんでいたマガンが一斉に飛び回りはじめた



「たそがれに雁を見る会」で、マガンの生態や観察のポイントなど、中村聡チーフレンジャーの解説を熱心に聞く参加者

運営する自然保護や環境教育の拠点で、1981年、全国からの募金1億円で開設された。この間、勇払原野の保全に取り組み35年目を迎えた。15年間にわたって希少鳥類の調査をしていて、昨年も、7種の絶滅危惧種の鳥類の棲息が分かった。3年連続してタンチョウの飛来を確認する一方、アカモズの営巣が減っているなどの懸念も明らかになっている。

国道36号沿いにある「道の駅ウトナイ湖」のそばに、環境省と苫小牧市が共同運営する「ウトナイ湖野生鳥獣保護センター」（苫小牧市植苗156の26）がある。ピジターセンターの役割も果たしていて、湿原の仕組みなど、さまざまな展示や観察スペースもあるので、立ち寄ってみるといい。そこからウトナイ湖サンクチュアリまでは遊歩道で1.3キロほどある。